

2015年11月25日

## ジュゴンの海、希望の灯

### 憎しみと破壊の連鎖―

11月15日、「花の都パリ」に激しい銃声がとどろき、華やかな街が血で染まりました。その惨劇の裏側にあるのは、日夜進行している中東でのフランス、ロシア、アメリカなど「有志連合」による激しい空爆による破壊です。憎しみと破壊の連鎖の犠牲者が、中東でもパリでも、抵抗する術もなく殺される人々でした。「対テロ戦争」という名の「反イスラム十字軍」戦争が更にエスカレートすることは、戦争の輪を世界に広げようとする「イスラム国」の思惑とも一致します。人々の声も願いも無視して、「平和と安全法制」と呼ばれる戦争法制の施行を急ぐ安倍政権はいち早く「十字軍」の一端を担おうとしています。力におごる大国の武力信仰に与する安倍政権の横暴さは、辺野古埋め立てを強行しようとする沖縄での動きとも連動しています。

### 権力による無法―

10月13日、辺野古埋立承認の取り消しという、沖縄県民の圧倒的な願いを受けた翁長知事の決断に、久しぶりの雲の晴れ間を見た思いをしたのも束の間でした。翌14日には、沖縄防衛局は知事の処分に対して、本来行政による横暴から市民を守るための制度である行政不服申請を濫用して身内の国交大臣に審査請求を行いました。また、防衛局は審査請求に伴い、知事処分の効力を一時停止することを求め、10月27日に大臣はその求めに応じ、埋め立て工事を強行する政府の姿勢をあらわにしました。11月17日には、政府は福岡高裁那覇支部に、知事の承認取り消し処分を取り消す代執行を求める訴訟を起こし、それに先立つ10月30日には、福岡高裁那覇支部の支部長が交代になり、2013年に千葉県成田空港用地内の耕作者に土地の明け渡しなどを命じた訴訟で裁判長を務めた多見谷寿郎氏が就任しました。安倍政権の意向が支部長交代の裏にあることは、隠しようもありません。政権は、沖縄を「大国日本」のための犠牲地として位置づけ、民意をも自然をも踏みつけにして埋め立てを強行するために、安保法強行「採決」のときに見せたように、独裁的な素顔をあらわにしています。

### 政権による自縄自縛―

政権による法の濫用は、埋め立て工事区域を、キャンプ・シュワブが使用するという虚偽の理由で、日米地位協定により立ち入り禁止区域として、ブイなどで囲い込むという暴挙にも現れています。しかしながら、この暴挙は、実は、政権による自縄自縛の事態を招いています。立ち入り禁止区域の設定により、埋め立て承認の根拠である「公有水面埋立法」の適用が不可能になる結果が生まれ、従って、埋め立て承認は法的には無効であ

るといふ状況が作られているのです。公有水面埋立法は、埋め立てられる水面が公共のもの、つまり、広く人々に開かれた区域であり、それを埋め立てる場合には、極力水面の公共性を尊重し、埋め立て工事の竣工が知事によって認可される（公有水面埋立法 22 条による竣功認可）までは、その区域を立ち入り禁止にするなどの排除行為をしてはならないということを前提にする法律だからです。安倍政権は、日米地位協定という、米軍を事実上占領軍と位置づける悪法までも濫用して工事区域を立ち入り禁止区域としました。ところが、そのことによって、莫大な国税を使って沖縄県の地方自治権を奪い、自然破壊をする埋め立て工事の根拠法を自ら消してしまったのです。（このことに関する、より詳しい内容について、お知りになりたい方は、会の弥永健一（[bicxf254@ybb.ne.jp](mailto:bicxf254@ybb.ne.jp)）までご連絡ください）。

#### 虹の戦士号―

辺野古埋め立てには、全世界からの抗議も寄せられています。11月初旬には、グリーンピースの船「虹の戦士号」が、164 カ国からの 74,669 名の抗議署名をもって那覇に寄港しました。グリーンピース ジャパンの小松原和恵さんは、「サンゴ礁が世界的に失われる中で、辺野古、大浦湾のサンゴ礁はとても健康な状態で、5300 種以上の生物がくらす生命の海です。政府は新基地の建設によって失われることの重大さに気付き、計画を見直すべきです。」とっています。ところが、内閣府は「虹の戦士号」による大浦湾、辺野古沖への航行申請を、明確な理由も明らかにしないまま却下しました。それでも、11月11日には、長く待たされた後、名護沖への航行が許され、稲嶺市長も乗船し、安倍政権への抗議署名を受け取りました。辺野古での最近の状況については、フェイスブックでご覧になることもできます（<https://www.facebook.com/teamzanokinawa>）。

#### ジュゴンの海―

この間、北限のジュゴン調査チーム・ザンは、辺野古沖、大浦湾一帯でジュゴンの食み跡調査を続けています。また、今年の 5 月～6 月にも沖縄防衛局の「環境監視等委員会」の研究者によりキャンプ・シュワブ東側沿岸で多数の食み跡が目撃されています。この 7 月～8 月の、辺野古周辺海域の、チームによる継続調査では、かなり広い面積で食み跡が多数記録されました。この海域一帯がジュゴンにとっての重要な餌場であることは周知の事実です。

暗雲が天を覆うような状況のなかで、絶滅の危機に追い詰められながらも、悠然と泳ぎ、ひたすら生きるジュゴンたち、ニライカナイからの使者として大切にされた彼らの姿は闇夜の灯ともいえます。

北限のジュゴンを見守る会  
代表 鈴木雅子